

日本国際経済学会関東部会

2004年12月18日(土) 中央大学後楽園キャンパス 3号館 3300号教室

報告者 杉嶋^{たかし} 岑 (ジャーナリスト)

『抑留体験から見た北朝鮮と日本』

(1999年12月4日 ~ 2002年2月12日)

はじめに ~ 私の問題意識 ~

大学2年の時、『60年安保』を迎えたが、当時、「社会主義社会に移行するのは、人類にとって歴史的必然である」とのマルクス経済学者たちの論陣に疑問を持ち、『国家と体制と国民との関わり』で、「どんな体制が国民にとって最も幸せなのか」について考えつつ、日本経済新聞記者になった(昭和40年4月入社)。入社後も産業界を取材しながら社会主義諸国の経済発展などをウォッチしていた。そして、もっと実地に踏査すべく中国、旧ソ連、ベトナム、旧東ドイツを訪問し、その延長線上に北朝鮮があった。北朝鮮には1986年、1987年、1991年、1999年8月と同11月の計5回訪問し、5回目の訪朝時に帰国直前、平壤(ピョンヤン)で拘束され、2年2カ月の抑留生活を送った。

<なぜ拘束されたか>

- 訪朝の都度、内閣情報調査室と公安調査庁(関東公安調査局)に懇請され、善意で提供した情報(写真、ビデオ、資料含め)が、北朝鮮側に筒抜けだった。拘束され、尋問を受け始めて5日目に内調、公安庁職員の中に北朝鮮工作員に内通している二重スパイがいることが判明。私の担当調査官は「お前が提供した写真、ビデオ、資料はすべてこちらに送られてきて保管場所に困っているくらいだ」と言った。ハツタリだと思ったが、チェックを入れたら本当だった。日本国に迷惑を掛けたくないと思い、初日夜に自殺まで試みたのに、犬死にだと思い、自白に応じることにした。5回目の訪朝も北朝鮮当局は、1987年の第2回訪朝以来、交流のあった『よど号犯』を通じてか事前に察知し、拘束することは既定路線だった。容疑は「北朝鮮の主権を侵害したスパイ」というもの。「旅行者コースを案内員に連れられて回っただけ」という私の主張は却下された。
- 私は北朝鮮ウォッチャーを続ける中に、日本国際経済学会に入会し、『北東アジアの経済発展における北朝鮮の役割』(仮称)について報告しようと思い、1996年に図們江(豆満江)開発、琿春経済合作地帯の現地調査をし、中国東北部の研究者たち(長春・東北師範大学や延吉・延辺大学や研究院)との交流を図った。1998年には、延吉市における国際シンポジウムや毎年、環日本海6カ国の研究者たちの報告する『新潟経済会議』にも参加し続けた。また、1997年には、訪韓して韓国開発研究院、農業経済研究所、統一院、韓国銀行で

北朝鮮関連の基礎統計資料収集と担当研究者との交流を図った。 その一連の私の動きは、第2回訪朝以来、北朝鮮工作員組織によってマークされ、「都内の書齋も千葉の自宅も盗聴してきた」(北朝鮮情報局員談)ため筒抜けだった。

- 。 帰国後、2003年7月9日、我が国にはスパイ防止法がないため東京地検特捜部に「内調・公安庁の職員某」を国家公務員法第100条の「守秘義務違反」として告発したが、「保留」扱い。

< 拘束され尋問され軟禁された宿舎 >

～ 拘束されてから解放されるまでに6ヵ所転々～

平壤ホテル3階32号室(1999年12月4日～同12月29日)

松林の中の招待所(平壤台地北辺斜面の一軒家、1999年12月29日～2000年11月19日)

平壤市内の招待所(石堀囲いの平屋建て一軒家。普通門から車で南西に約5分。2000年11月19日～2001年8月16日)

平壤市内の高層団地群最北棟1階の1室(普通門から車で北東に約3～4分。2001年8月16日～同年12月11日)

に同じ(2001年12月11日～2002年2月6日)

羊角島国際ホテル43階27号室(2002年2月6日～同年2月12日)

(食事は3食きちんと出された。 はまあまあ。 ～ は劣化し、 は「人道主義的待遇」の宣伝で最高のデラックス)

< 尋問の方法 >

- 。 肉体的拷問はなし。内調、公安庁、旧KCIA(国家情報院)に提供した情報・資料を担当調査官(金成南・キム・ソンナム、44歳、日本語堪能)に自発的に時系列的に自白調書(A4判)に認める。内外の工作員たちが報告してきた情報を正解とし、それに私の自白がどこまで肉薄するかがポイント。パスすると清書し、それを調査官は、ハングルに翻訳して情報機関トップに上げる。自白のウソがバレると大激怒。A4判で1500枚ほど調書を書いた。何事もスパイ仕立ての筋書きにしないと許可されず。

< 日本政府・外務省の救出の動き伝わらず >

- 。 私の身柄は拘束初日から3ヵ月間余は、終日、尋問責め。2000年3月初旬の『尋問終結宣言』後は、日朝政府間の外交カードに転化させられ、「帰国は日本国政府の謝罪如何」(金調査官)となり、「自白すればするほど早く還す」との拘束当初の約束は反故に。
- 。 しかも、日本国政府・外務省の救出の動きは、さっぱり伝わって来ないどころか、「『杉嶋は気違いである。我が国(日本国)政府とは関係ない』と言って来た」(金調査官ら)と言われ、私は「邦人救出の義務を怠っている」と、

日本国政府・外務省に甚だしく不信感を抱く。2000年4月5日から平壤で行われた日朝国交正常化交渉でも「日本側随行記者団の誰1人として『杉嶋はどうなっているか』の質問がなかった。政府は情報管制しているに違いない」(金調査官)と言われ、日本の政府もマスコミも全く頼りにならないと思った。

- 。2000年6月21日午前10時30分に人民文化宮殿(平壤)で日本国政府に身柄引き取り交渉のテーブルに就かせるための記者会見を行うことになった。彼らの用意した声明文や想定問答集を暗記させられ、前日、情報機関トップら7人の前でリハーサルまでして待機したが、当日、迎えの車は来ず、急遽、中止。中止理由は民放テレビのTBSが、北朝鮮当局の情報操作に乗せられて、同日夜、「杉嶋は平壤で有罪判決を受けた」の誤報を流して日本国政府を牽制することになっていたからだと、帰国後にTBS外信部長・岡元隆治氏の家内への返書で分かる。TBSは、この誤報で我が家族をパニックさせたのに何の謝罪もない。

<今思うと確かに奇跡的生還 - なぜ私が帰国できたか>

北朝鮮情報当局トップによる解放通告(2002年2月11日夕刻6時、ピョンヤン市内の羊角島国際ホテル43階27号室)では、「あなたは、我が国の主権を侵害するという共和国刑法48条に抵触する大罪を犯したが、家族からの嘆願と外務省からの嘆願等を考慮し、寛大なる措置を取ることにした。あなたを国外へ追放する」と。

(この後、帰国後は日朝友好のために尽くす 共和国の悪口は言わない
ここで起こったことは、口外しない の3点を盛り込んだ誓約書を書かされ、印鑑と拇印を押す。

更に あなたを一生見張っている あなたのしていることはその日の内に我々に連絡が届く 誓約を守らないと1ヵ月以内に、この世から消える
あなたには家族も親類もいるだろう と優しい語調ながら繰り返し脅迫した)

私の推測では

身代金(保釈金)交渉の成立(?)

「200万円程度」と解放の日の2002年2月12日、日本へのトランジットの北京空港で出迎えの佐藤重和外務省アジア大洋州局審議官(当時)が私の質問に答える。(後日、新聞記者団に「そんなことを言った覚えはない」と食言。また、私の質問した段階では「まだ身代金は払ってない」とも言明)

逆洗脳が奏功

- 。北朝鮮当局は、帰国後に彼らに不利になると思われる人物は帰国させないし、平気で処刑し病死か事故死扱いする。だから徹底して彼らにマインドコントロールされたことを彼らに認知させる必要があった。

- このため、私は調書を読み上げ彼らにビデオ撮影される時、“スパイ容疑”を認め、悔い改め、邦人救出の義務を怠っている日本政府を非難し、私を帰国させようと腐心している共和国政府の人道主義的態度を称賛し、「どちらが敵か味方が分からない」と言い続けた。

(私を日本に帰国させても良いかどうかについては、担当調査官、監視員、情報機関トップ、共和国政府・労働党幹部らの高くて厳しいハードルをクリアしなければ帰国できない。特に、最も高いハードルは共和国政府並びに党幹部の政治的判断にパスすることである)

帰国させるタイミングが見付かった

- 他の拉致被害者と違い、私が拘束されたことを日本が知っているため彼らも徒らには殺せない。外交的カードとして最高の条件で利用できるタイミングを計っていた。「囚人である」と同時に「人質」のため、待遇は肉体的拷問もなく比較的良好。
- 米ブッシュ大統領の「悪の枢軸」発言で膠着した米朝関係打開の切り札として、私を帰国させることで日朝関係に友好的なシグナルを發し、日本を通じて米国に向けてもシグナルとして使おうとした。
- 2年2ヵ月間、彼らは、私を捕らえたものの、取り扱いを持て余していた。「我が国が経済的に厳しいときに、お前を捕まえた」と愚痴まで言った。「早く身代金(保釈金)を取って追いつきたい」と本音では思っていたようだ。

< 恐るべき北朝鮮の諜報能力 >

~ あらゆる卑劣な手段を駆使した諜報 ~

1987年以來、自宅も書斎も盗聴されていた私の個人情報はいくらも筒抜けだった。拘束1ヵ月余の時、腹痛で平壤親善病院に連れて行ってもらったが、私は自分の体重を間違えて「取り調べがきついで87kgあったのに78kgに減ってしまった」と独り言を言った。傍らで聞き付けていたらしい調査官から1週間後に「お前の体重は78kgでいいじゃないか」と言われて驚いた。公式記録があるのは、日経定年直前の春の健康診断記録くらいのもの。

私がK C I Aとの関係の自白を洩ると私のかつて勤務していた日経のソウル支局長(現政治部次長)からのタレ込みF A Xが来て私を身動きできない死活の大ピンチに陥れた。このように外国特派員まで諜報網に組み込んでしまう組織化能力を持っている。

ペンネームで文藝春秋や徳間書店のオピニオン誌に書いた拘束前の『北朝鮮紀行』の筆者が私であることを、現M銀行東京中央支店の原稿料振り込み口座から特定して割り出した。私は顧客管理をしっかりと抗議と警告のため、帰国直後、当時F銀行本店に赴き役員に面会を求めようとしたが思いとどまった。

情報機関トップの秘書は「公安庁はザルだ。内調も一寸ガードが固い程度。日本全体の防諜は、丸裸同然」と嘯っていた。

拉致問題の本質

< パルチザン国家による必然の結果 >

- 。 朝鮮式社会主義の朝鮮半島全土化の冒険
朝鮮戦争(北朝鮮では「祖国解放戦争」と呼ぶ。1950 - 1953 年)後も韓国政府の転覆と社会主義化を煽るための工作員を養成
目的のためには手段を選ばず(マキャベリズム)。西欧的な人権思想のない国。抗日パルチザン活動での英雄とされる金日成が、旧ソ連の傀儡政権として1948年9月建国した北朝鮮は、今だにゲリラ的(パルチザンの)発想と手法から抜け切れず、『主観の論理』『力の論理』を信奉し、「自分のやる事はすべて正しい」として、無法国家の如く振る舞っている。金日成(本名・金成柱)の経歴も虚偽と欺瞞に満ち、神格化のための美談が捏造されている。

< 北朝鮮への対抗策はどうあるべきか >

国民世論を団結させ、政府の善意を信じて支援する

北朝鮮は、絶えず日本の世論の動向を気にしている。日本の新聞のベタ記事でも見逃さず、自分たちの有利になる情報として役立てている。(今回の拉致問題でも小泉首相の毅然たる態度と国民世論の盛り上がり、金正日総書記をして、「拉致」を告白させた)。北朝鮮は結構、相手の出方重視の「待ちの戦術」である。相手の出方次第のところがある。

日本の外務省は「秘密外交」から「国民外交」に意識変革せよ

拉致された人たちの生存者、死亡者名簿発表に見せた対北朝鮮折衝の担当者たちの態度は、旧態依然のエリート意識による「秘密外交」に終始したため、外務省不信につながった。

外交には秘密は付きものだが、「情報化」と「知る権利」の普及した現在では、情報開示によって、国民の信頼を受け、これをバックに難敵とも毅然として外交交渉する。そういう時代に来ている。

日米韓は連携を緊密且つ強化せよ

小泉訪朝は、我が国が言い続けてきた「拉致の存在」を彼らが、ともかくもトップの金正日総書記自らの発言として認めさせたことに歴史的な意義がある。しかし、これは、米国の強大な且つ毅然とした「軍事力の行使も辞さず」の後ろ盾があったればこそである。日米韓の同盟国間の結束こそが今後とも重要だ。

「経済制裁も辞さず」の断固たる姿勢を貫くこと

安易に国交正常化を進めず、『経済制裁と支援』を強力な外交カードとして使い分けて拉致やミサイルなど諸問題の完全解決を図る。

北朝鮮とはそもそもどんな国か

政治構造 朝鮮労働党による事実上の一党独裁

- 上位下達のヒエラルキーの徹底。下位上達はありえない。
(一応、「何か提起することはないか」と下位の申し出を聞くが、「命令は絶対」の軍隊組織)
- 指導者(金正日総書記) 労働党・政府 一般大衆

経済構造 社会主義国 計画経済
(第○次 カ年計画という形の運営)

北朝鮮の現状はどうか

政治状況

- 未来永劫「金日成主席の国」宣言(金正日略伝)。金正日現政権維持を自己目的化。
- 金正日総書記(元首として国防委員長兼任)の事実上の独裁政権。ウルトラ軍事国家。国民生産における軍事費並びに諜報活動費の割合の余りの大きさが益々民生を圧迫。

経済状況

- 経済危機は年々深刻化。停電は夜間ばかりでなく、日中も1日平均3~4時間。いずれも飯時を狙う。24時間中、約10時間もの停電。「偉大な指導者同志は、国民生活の隅々まで温かい配慮を巡らしている」という指導者崇拜教育のプロパガンダが空々しい。生活用水も不足し、浴槽の水は洗濯用とトイレを流すため。2年2ヵ月間の抑留生活で私は6回しか風呂に入れてもらえなかった。炊事婦のオバさんも水タオルで体を拭いていた。炊事用の水は給水車が駆け巡って補給。
- 「自力更生」の自給自足経済の建前と「外資に依存する経済は危うい」とする経済政策のため経済発展につながる大胆な改革開放政策は取りにくい。
- 一方で、中国の社会主義市場経済の市場圏にしっかり組み込まれ、また、緩衝地帯の役割を果たされているらしく、私に支給された日用品には2年も前に消費期限の切れたチョコレートや洗剤、シャンプーなど中国製が目立ち、これが日本製を駆逐している。北朝鮮が中国から安く買い付けたか無償供与されたのか。ただ、今でも高級品は日本製が主流。
- 医薬品不足。どの「招待所」にも常備薬などない。日本から持参した歯痛止めで腹痛止めの薬に転用して凌いだこともあった。

社会状況

高層アパート 15 階建て 1 階窓から垣間見た眺め

(2001 年 8 月 16 日 ~ 2001 年 12 月 11 日)

- 日本の戦中・戦争直後の原風景の感じ。絵画で言ったらせいぜい後期印象派時代までか。
- 「平等社会」の不平等の発生。党幹部らしい金日成バッジを付けた老婦人の元にベンツやトヨタ高級車で米や生鮮魚介類など食糧を運んでくる人たちを目撃。私の調査官は、いつもタバコもライターも英国製ダンヒルで、平の監視員たちは、国産の安タバコ。調査官の腕時計は高価なオメガ（「200 万円もする」と豪語）なのに、監視員たち（40 歳前後）はインドネシア製か中国製の安物。若い監視員（21 ~ 22 歳）は、それさえ持っていない。
- 彼らには、ドイツ製品が車でも縫製機械でも世界最高だという神話がある。また、米国嫌いなため、英語は文字通り英語であり、米語ではない。然も自習がほとんどのため、another を an other（アンアダ）などと発音し、「アナザー」と発音した私を「間違っている」と注意する程の確信犯。「自分こそ正しい」とする風潮が上から下まで漲っている。
- 「我が青春に悔いなし」（黒澤映画）のような清純そうな制服男女の出会いを見た。
- 20 ~ 27 歳くらいの若者に性（セックス）はタブー。哀しいほどにストイックで、彼らの会話に異性の話題は全く出ない。しかし 40 歳くらいの既婚者には、日本人並みの下ネタも。中には、携行化粧品セットを持っているホモ気のある（？）38 歳の監視員もいて、彼には山本寛斎や三宅一生デザインの私のハンカチを 4 枚ほどその都度、「朝鮮焼酎グラス 1 杯とハンカチ 1 枚とを引き換えてくれ」と持ち掛けられ、持って行かれた。土産用に日本から持参したマールボロのタバコも 21 箱ほど、無心された。（残り 10 数箱も帰国直前没収）
- インフラの遅れ目立つ。特に少し郊外に行くと舗装道路が少ない。また、通信インフラが整備されていず、2001 年 11 月 4 日から 11 日までの 8 日間、軍人や若者を駆り出してキムチ作りのための収穫白菜をトラックに山積みして、アパート団地に配給する作業効率の悪さ（重複輸送）はひどかった。宅配便のノウハウを取り入れたら、燃料の節約も効率化しよう。
- 軍人がやたらと目に付いた。毎日、密かに統計を取っていたら通行人の 10 人に 6 人くらい。（近くに兵舎か）。女性兵士は、いずれも生まじめその

ものだが、男性兵士は夏はキャンデーをちんたら食べながら帰途につき、冬は背を丸めてポケットに手を突っ込んで出勤していた。幼児を抱えて奥さんと出勤する兵士もいた。実に人間らしくのどかで、金日成広場で毅然として行進する兵士たちのイメージとは程遠かった。

- 社会福祉が行き届いている『地上の楽園』のはずなのに、80歳近い老婆たちが重い袋を背負って行商していた。開けたところを見たら、中身はプラスチック製の洗面具や台所用品。
- 職場の同僚に両脇を抱えられながら病院に歩いて行く憔悴しきった婦人を何度も見た。日本なら救急車出勤間違いなし。
- 若い軍人たちは傲慢だった。停電でエレベーターが動かないことにもよるが、広場に車で乗り付け、正しく傍若無人で大声で高層アパート上層階の部下を10分以上も呼び続けた。車も広場の流れにT字型に置きっ放し。通行人の迷惑お構いなし。夜、人々が寝る時刻にも来て大声を上げていた。恐ろしいのか誰も注意しない。
- 犬を飼える人は、ステータスシンボルらしいが、朝の散歩に鎖を付けている人は稀で、通行人に吠え立てても飼い主は平然としていた。
- 運転手を雇って1日掛かりでリング狩りに出掛けてきて、夕刻、車のトランクから一所懸命、布袋に詰め替えている父娘もみた。

私が覗き見していたのを、契約運転手に見付かって大声を上げられた。しかし、その夜、口止めなのかリング10個ほど監視員宛てに父娘が届けに来た。

- 監視員も通行人も事ある毎に、唾や痰を庭や路上に吐き捨てた。庭に布団を干す時、干からびてピカピカした痰の上に直に干すのが実に気持ち悪かったが、彼らは平気だった。実にマナーが悪く不潔。しかし、見掛けの衣服だけは格好を付けて気にしていた。軍服が良く似合う連中だ。上司に呼び付けられてオフィスに行く時は、いつも真っ蒼な顔で緊張していた。帰って来ると残りの皆が「どうだった」と詰め寄って一喜一憂して様子を訊いていた。
- 水不足のため広場の石の手摺りを跨いで越え、斜面の叢くさむらで小便や大便をする老婆の白く黄色っぽい裸のお尻を何度も見た。(バーチャルリアリティーでなく「婆ーチャンリアリティー」だと思わず苦笑した)
- 3階から主婦が近くに通行人がいるのに平気で投げ捨てた木片を薪たきぎにするのか、にっと笑って拾って持ち帰る通行人の女性を見た。生きるために庶民は実にしたたかだ。
- ただ、一般の通行人を見ると実に健気で真面目に必死に生きていた。
- 昼間は立派に見える高層ビルやアパート群も停電ばかりでエレベーターも動かず、水や物資を運ぶための階段の上り下りは、さながらシゴキそのもの。夜は、闇夜にまるで巨大な墓石群のような不気味さ。

食糧危機は獣や鳥まで

監禁された窓から畑を見たり、庭の散歩の時に松林を見た光景
犬が監視員の んだチリ紙をむしゃむしゃ6回も食べた。

ネズミが餌を探しに巣より遠出しすぎたため巣に逃げ遅れて飼犬に食べられてしまった。

啄木鳥が、夕方、畑に干した豚骨のこびりついた肉を一所懸命突いて食べているのを見て、「森の大工さん」のイメージが狂った。翌朝、もう1羽を連れてきていた。スキを狙うネズミを蹴散らしつつ。多分、2羽はカップル。夫婦の情報交換の良さと連係プレーに感動。

空中には餌がないらしく、燕が何度も畑に下りて餌を探していた。燕は飛んでいる羽虫を食べるもの、との認識を変更。

チョンソ(ムササビ)が、カーチ(カササギ)の卵を狙っては“戦争”していた。チョンソがカーチ夫婦に負けて松の枝から枝を渡って逃げ帰って行った。

雀や四十雀を狙って市内の招待所(宿舎)の周りの高い榆の木に鷹が何度も狩りをしに現れた。夜には声の仏法僧(木の葉木菟)も来て鳴いていた。

カササギは言うに及ばず雉子が招待所の畑にまで餌を漁りに来ていた。

広場のプラタナスの上に群がる雀を窓の割れ目を通してベランダの手摺りの上に米粒を丸めて弾き飛ばして乗せて呼び寄せ、餌付けに成功。毎日、すぐ窓下に6~8羽来る野生の雀の美しさを楽しんだ。

平壤台地北辺の斜面にある山荘(招待所)の周りは、松林に囲まれていたが、自然の産物の一切が、春は雑草の若芽から松毬の種まで、冬は枯れ木や枯れ草に至るまで、山羊やチョンソの餌や竈の燃料にと、無駄なく生態系が維持され、すべて使われ尽くしていた。原油不足で重化学工業が発達していないため空はスモッグもなく澄み渡り、人工衛星を肉眼で7回も見た。抑留中、日本では悩まされた花粉症に罹らずに済んだ。

大人の楽しみと子供の遊び 娯楽の共通はサーカスと舞踊とテレビ

監視員たちの生活ぶりを見ると日々、時間の食い潰しで、明日につながる勉強をせずに、また計画経済の国なのに、計画性や自主性がまるでない。歴代の監視員延べ14~15人に共通していた。朝鮮労働党のエリート党員らしい監視員たちでさえこんな具合だから、とても『強盛大国』建設は覚束ないように見える。

故・金日成主席父子は歌舞音曲の好きな自国民の特性を見抜き、逆手にとって安価で気軽に楽しめる歌の中に自分や党や制度への忠誠心を掻き立てる歌詞を織り込み、「我が国の革命は歌と共にあった」とプロパガンダ教育を徹底させた。人文字や舞踊も革命を称え、推進するシナリオ構成。

< 大人のガス抜き >

- タバコ かなり簡単に手に入るらしく、若者でも成人するとほとんど吸っている。(但し、5回の訪朝を通じて女性の喫煙者は1人として見掛けなかった)。手持ちがなくなると、刻みタバコを紙で巻いたり、新聞紙を丸めただけでタバコの代用も(幼い頃、私は日本でも見掛けた)。
- トランプ 大の男が1人で1日中、ベッドの上に^{あぐら}胡坐をかいて飽きもせず遊んでいる。「占いをしている」(監視員)のだと。2人でやっている時は、金日成主席や金正日総書記の映像がテレビで流れているのに、見向きもしないで夢中。口では、称える歌を歌っているのに、本当に尊敬しているのか甚だ疑問に思えた。プロパガンダで支えられている指導者はプロパガンダがなくなれば、直ぐに忘れ去られるのでは、と直観した。
- 朝鮮将棋 日本の将棋より単純らしく勝負時間も早い。2人集まると直ぐ始めていた。それも1日中、同じ相手と飽きもせず繰り返さしていた。時には『将軍』を称える歌を2人で大合唱しながら。異邦人の私には異様に見えた。
- 歌 花鳥風月を扱った『故郷の春』のような歌よりも、指導者金日成主席、金正日総書記や労働党を称える歌が主流。『党は母の姿』というような労働党を賛美する歌も手帳にびっしり。暖房の効かぬ部屋で寒さに震えながら『将軍』を称える歌を歌う光景も。軍隊(速度戦^{トキ}青年突撃隊なども)の鬨の声も、朝夕人為的に発せられていた。

< 子供の遊び >

広場を見た風景

缶蹴り、石蹴り

駆けっこ

凧揚げ

実に粗末な作り。新聞に糸目をつけただけ。

木登り

プラタナスの実などを兄貴分の子供が7メートルも登っては、摘んで幼い男女に投げ落としていた。さながら『隠れた英雄』の感じ。

メンコ

名刺大で赤、黒、白の彩色。単純な絵模様。

雪そり橇

手造りの木製が主流。赤、黄、緑の生地プラスチック製もちらほら。雪がなくなって路面が凍るとスケートの代用に。

歌

『三大自慢の歌』のように「指導者と党と社会主義制度」を称える歌などを、午前8時頃の登校直前と夕闇迫る6時頃、広場のどこからともなく、女声コーラスに続いて男声コーラスが、競うような形で聞こえてくる。当番制か義務制になっているのかも。

なぜ北朝鮮は崩壊しにくいのか

拘束されて間もなく調査官は私に

「お前たちは我が国が、ルーマニアやソ連のようになぜ崩壊しないのかと疑問に思っているだろう。教えてやろう。それは、我が国には他の国と違って偉大な指導者がいるし、我々情報機関が活躍しているからだ」と。

これは、語るに落ちたセリフだが、いみじくも正しい。それだけに国民にとって救いようのない、逃れようのない悲劇でもある。国家権力が“内向き”の侵略をしているからである。

<私が分析する「北朝鮮が崩壊しそうでしない理由」は>

軍事独裁による秘密警察を駆使した恐怖の強権国家である。反政府、反党、反指導者分子は立ち所に密告され、極刑に処せられる。

(一説には20人に1人が強制収容所送りになっている、とも)

「偉大な指導者同志は国民生活の隅々まで温かい配慮を巡らしておられる」。だから国民は、それを感じて「指導者に恩義を感じ忠誠を尽くそう」という報恩、恩義の構造を精神的に構築する国民教育を徹底させる。いわゆる金日成・金正日父子による『現地指導』もこの延長線上にあり、国民に「有り難がらせる」狙いがある。

「温かい領袖様の懐に抱かれて育った私たちは、何て幸せなことでしょう！」と幼い頃から、頭に刷り込まれて育てられる。「私たちは、他国のものを何も羨みません」「私たちは今、最も幸せです」とも。これらは、高等中学校用の英語の辞書の例文である。つまり、「欲しがりません。勝つまでは」(日本の1942年の国民標語)のように潜在需要があるのではなく、需要そのものの芽まで摘み取ってしまうから、消費経済へのモチベーションまで断たれてしまう。これでは経済発展も望めない。これによって為政者は統治し易いように国民の不満発生をミニマムに押さえ込んでしまっている。お仕着せの配給品を不平も言わずに有り難がってもらおう国民でなければならない。消費者が育たぬシステムであり、また、消費者が育ち、力を持ったら体制崩壊につながる政治経済システムでもある。

情報鎖国主義の徹底

他国からの影響をシャットアウトし、金日成・金正日神話教育を徹底させる。カルチャーショックを起こさせないようにし、指導者の行政能力の客観比較を国民にさせない。

なぜなら、指導者や党、政府への疑問、不信は、自浄能力の乏しい独裁体制では、即、政権崩壊につながりかねないからだ。

政権崩壊は体制崩壊をも意味する。だから、情報が入ってくるのを防ぐと同時に、情報が持ち出されるのにも神経を使う。新聞記者やカメラマンは、「スパイ」の位置付けである。

また内向きには、『強盛大国』『自力更生』などのスローガンで国民の鼻面を引き摺り回す。

社会的自我に目覚めぬ大衆

500年続いた李王朝、36年間の日帝植民地支配、56年間の旧ソ連の傀儡としての金日成お仕着せ政権 北朝鮮国民には市民革命の経験がなく、被支配に馴らされている。民衆に社会的自我の目覚めがなく、指導者を受け入れ易い体質。確かに代議員選挙などはあっても自由主義社会のそれとは、質的に違う。最初から結果が分かっているに等しい。

儒教を精神的風土としている家父長制度の国家

社会主義社会で世襲制をしたのは、この国だけであるが、「我が国が2代続いて偉大な指導者に恵まれたのは、何たる幸せな国民か」（日朝辞典）と、労働党はプロパガンダ教育をして、他国の批判も何のその。これからも朝鮮式（ウリ式）を貫くと明言。

国家主権の壁に阻まれ他国は内政干渉できない

金日成・金正日政権の失政のツケは、物言えぬ大衆に回り、ひたすら耐えるか餓死するか病死するか、あるいは亡命するかの悲しい選択肢のみ。それでも他国は手を出せない。人道主義的援助（例えば米などの食糧支援）もその使途のチェックさえ、ままたらない。

北朝鮮は中国の『持ち駒』

北朝鮮の運命を握っているのは、米国でなく中国。政治・経済的にもすっかり生殺与奪の権を中国に握られており、中国は米中外交でもカードとして利用している。安易には崩壊させない。

< 北朝鮮経済が発展しない理由 >

軍事費・諜報費の民生圧迫

GDP 228.5 億ドル（2003年） 1人当たり GNP 1,000 ドル（2003年）

1ドル = 2,200 ウォン（切り下げ前） 1北朝鮮ウォン = 約 0.8 円（公定レート）

国防予算 52.2 億ドル（2002年推定）と言われている。北朝鮮最高人民会議（国会に相当）は、2003年3月26日、国家予算を採択し、国防費比率を 15.4%（前年比 0.5%増）とした。しかし実際には、GDP の 33.9%に達する、と推定される。現役兵員数 108.2 万人（1999年）

人口 2246.6 万人（2003年） = 日経と SAPIO の特集記事などより引用

社会主義体制維持が自己目的化（社会主義的計画経済の枠組みに固執）

- 金正日体制の永遠化が絶対的前提 このため「指導者の都合」と「政治の論理」で経済を運営し、経営資源の適時・最適配分ができない。
- 外資依存を拒否 外資導入を拒否し、情報鎖国主義を貫かないと

指導者の統治能力に破綻。敵性国家としての米国と韓国製品の観光客による持ち込みも禁止。分かれば没収（但し、没収品を党幹部が着服とか）。輸入品と共に情報が持ち込まれ、自国の指導者能力に疑問が生じるのを防ぐため。

- 。生産力増強に繋がらない非生産的人口が多いこと、また、政治的行動（デモやスローガンなどの決起大会）に労働資源を頻繁に動員。
- 。国民に現状を『この世の楽園』と思い込ませ不満を抱かせないプロパガンダ教育をして将来の消費につながる潜在需要の芽まで摘み取る。

インフラ整備の遅れが阻害要因に

特に通信インフラの遅れ（電話普及率の低さ）が目立つ。平壤市内の交通機関（トロリーバスと地下鉄）はまだしも、地方では自転車もままならず、経済全体の発展テンポが「人間の歩くスピード」に制約されている感じで、「マイカー 1 家に 2 台」と言われる韓国とは雲泥の差。1 家族の生活費が 1 ヶ月約 1 万円と言われているので、約 1 万円もする自転車は高級品だ。丈夫な日本製中古自転車の需要が強い理由。

マスゲームなどのイベントに経営資源を使いすぎる

金日成主席 誕生日の『太陽節』（4 月 15 日）、金正日総書記の誕生日（2 月 16 日）、その他 建軍記念日、労働党創建記念日などには、全国からこの日の慶祝のために金日成広場やメーデースタジアムを舞台に『人文字』や『山車』など一大イベントが繰り広げられる。すべて金日成・金正日父子の支配体制強化のためのプロパガンダに利用されている。国全体が大真面目で党・政府演出の“大人の学芸会”をやっている感じである。国民向けの娯楽であると同時に教育（洗脳）投資の位置付けだ。

『大陸』中国に比べて『半島』北朝鮮の指導者の矮小性

仮想敵国の米国からさえモトローラの通信技術、IBM のコンピューター技術、GM の自動車技術など、資本も技術も情報も貪欲に導入して国力増強に奮進している中国に対し、「外資に依存する経済は危うい」とする北朝鮮は、羅津・先鋒の特例でさえ うまく行っていない。指導者の質の違い、スケールの違いと言える。その結果、結局、中国の市場圏の緩衝地帯として組み込まれて経済的に隷属し、生殺与奪の権を握られてしまっている。

『力は正義』の基本認識では中朝とも一致しながら、北朝鮮は目先の指導者の政権基盤護持にのみ関心を払い、国力そのものを今やドン詰まりな程に疲弊させている。

“ゼンマイ仕掛け”の経済システム ～「現地指導」の欺瞞～

- 。「現地指導」は、土竜叩きのようなもの。金正日総書記（かつては金日成主席）が、工場や農場をはじめ問題の生じたところに その都度出掛けて指導する。しかし、本来、現場の責任者の方が、実態も解決策も良く知って

いるはず。「指導者の権威を見せ付ける」ことと、その「指導者の“権威”を必要とし、依存する現場」が構造化。指導者が来ないと現場独自の改革・改善のできない非効率さ。

- 新義州の食品工場に金正日総書記が現地指導した時の発言内容
「食品は人民大衆の口に入るものであるから、呉々も衛生面に注意するように。工場の構内も清潔に保つべく留意するように」
(これを受けて班長格の女性が全員を集めて“お言葉”を伝え、将軍様の意に沿うよう「頑張ろう！」集会をする)
- ある発電所を開設した時の現地指導の発言内容
「帝国主義諸国の包囲網の苦難の中で、よくぞ発電所を開設できた。開設を成功させた労働者諸君の苦勞と栄光を称えたい。これで我が国の電力供給に問題はなくなった」と。(経済問題なのに、まず政治的スピーチ。実際には、毎日、昼夜含めると10時間ほど停電!!)
- 2002年2月10日(解放されて帰国する2日前)に見たテレビ
「金正日 総書記の現地指導の回数 万回、延べ行程 十万km」と。
指導というものは、「量」ではなく、「質」が問題のはず。然も自由主義経済下なら、いちいち指導されなくとも「売れない」という形で不良品や割高品は、市場が自動的に弾き出してしまふ。だから黙っていても生産・品質管理に励む。「上位の命令(ネジ巻き)がないと何もできない」という意味で社会主義経済は甚だ“ゼンマイ仕掛け”の“エレクトロニクス以前”の経済システムと言えよう。

「成果」より「理念」先行の素人労働

私の目の前を毎金曜日の朝になるとスコップを担いで労働奉仕に出掛ける6~8人の主婦の団が通った。また、テレビ映像で堤防造成作業のような大規模プロジェクトに動員されている一般人の作業風景をよく見た。「労働奉仕」に依存する社会構造もさることながら、作業効率から言っても「餅は餅屋」の職業的プロの土木建築会社の成果には敵わないはず。国造りのための「共同作業」の理念は美しくても成果は、“高校野球”のレベルでしかない。「事故発生率も高い」との脱北者の証言もある。素人が共同して一所懸命頑張る社会システムは、結果として真に国民のためになるのだろうか。「頑張ろう！」という精神主義はあっても個人レベルにまで科学的な生産管理や生産性の概念が浸透していないのではないか。

「時間」「コスト」概念の欠如

エンジントラブルを起こしたトラック(左ハンドル、旧ソ連製)を修理するのに、他に連絡も取らず、1人で広場の片隅でのんびりと1日掛かり。社会全体がゆったりとして「時間」「コスト」の概念が欠如した感じだ。「“見えざる神の御手”が市場を調整してくれる」とされる自由主義経済下

と違い、社会主義計画経済下では、一部門だけの生産性が突出して上がったとしても全体のバランスが崩れるだけなのだろう。とすると、これも社会主義体制の構造的欠陥とも言えよう。

2次元世界の一般大衆

我々、自由主義経済下ではビジネスマンをはじめ、「タテ」「ヨコ」「高さ」「時間」「情報」という5次元世界の中で情報密度の高い活動をしている。然るに北朝鮮社会は、指導者・金正日総書記とごく一部のトップだけが5次元世界の住人で、あとは、言うなれば、2次元の平面上を動く持ち駒のようにロボット化している。従って社会全体の情報密度が低い。これは国際的な情報社会にあって、北朝鮮の政治経済システムの致命的欠陥ではないかと考えられる。つまり、タテ系の情報（命令）があってもヨコ系の情報（交流）のない社会である。傀儡（くぐつ）人形の世界でもある。体制転覆の陰謀を促しかねないヨコ系情報には、国家安全防衛部など情報機関が目を光らせている。

「金日成父子は絶対無謬」の神話

「指導者同士は国民生活の隅々まで温かい配慮を巡らしておられる」と幼い頃より『動機の善』を脳に刷り込まれているため、インテリ層まで金日成父子を無謬だと信じ込み、失政にメスを入れる発想さえ持たず、事実、批判できない『聖域』が多すぎる。社会現象を「なぜだ!？」の発想で自由に問い直す真の社会科学のない国である。これだけ停電の多い毎日なのに何の疑問も持たないでロウソクを囲んで夕食を摂る大学出の監視員たちを不思議に思った。問題を摩り替えて、こうなったのも北朝鮮を取り巻く、米国を頂点とした帝国主義勢力の外圧によるものと教え込まれているようだ。

< 『金正日略伝』を読んで >

～ 労働党・政府に見られる恒久的危機感 ～

社会主義体制維持の生命線である「指導者 党・政府 一般大衆」のタテ系列（ヒエラルキー）崩壊防止。このため「党・政府の周りに大衆を結集させる」ことを、まるで阿鼻叫喚のように繰り返し繰り返し訴えている。そのため 金正日総書記が実に優秀で慈悲深く素晴らしい指導者としての資質を持っているか、体制の求心力としての指導者神話が捏造されている。

金日成政権の継承者としての金正日政権の恒久的維持。

私の担当調査官は「旧ソ連を崩壊に導き、社会主義諸国に致命的打撃を与えた」としてゴルバチョフを憎々しげに非難していた。と同時に、「自分たち情報機関の役割を重視して金正日総書記が 時折、励ましに来て下さる」と言うってから、思わず「失言した」と感じて話題を変えた。

大衆に労働意欲を掻き立てさせる動機を「政治的・道徳的刺激を基本とし、それに物質的刺激を適切に結合させる」などと、苦慮している。物質的刺激だけや政治的・道徳的刺激だけを否定。しかし、私が見るところ、労働党のエリート党员たちである調査官や監視員も物欲はかなり強い。というより物不足による飢餓状態。金正日政権が崩れたら、あっと言う間に北朝鮮社会は流動化し、ベトナム化するだろう。調査官クラスは、ヤセ我慢で見栄を張り、私の前では物をやたらに無造作に捨てて見せていた。

< 「臨戦態勢下」を維持 >

情宣車の“来襲”

毎朝、毎夕のようにアパート団地に情宣車が来て「偉大な指導者」と「朝鮮労働党」の素晴らしさを称え、平壤市民の忠誠心を掻き立てる放送をスピーカーで流す。また、大通りを車上の前後にスピーカーを付けた情宣車が『金正日将軍の歌』なども織り込んでアジリながら流している。

半年に1度抜き打ちの灯火管制

夜、隣のアパートから突如、『灯火管制』の回覧状が来る。その時の監視員たちの真剣さと慌てふためき方は、凄い。窓のカーテンを下ろし、1時間ほど停電。ところが、一騒動収まると慣れたもので、携帯電灯（日本のナショナル製）やロウソクを囲んでトランプ遊びや朝鮮将棋に興じている。

軍隊や速度戦青年突撃隊のデモ

毎日（特に朝と夕）、関の声がどこからともなく聞こえてくる。また、月に1度くらい、大掛かりなチンドン屋のように軍楽隊が鳴り物入りで団地の中を練り歩く。

執拗に『抗日の歴史』を映像で流す

テレビのアナウンサーが、まるで霊媒か巫女がトランスしたような口調で抗日パルチザンや金日成英雄伝を繰り返し、来る日も来る日も“苦難の行軍”の映像を流し、オーラを視聴者に乗り移らせようとする。テレビは娯楽の最たるもので、「テレビを見ると受け身になりバカになる」という日本とは、大違い。政府のプロパガンダやメッセージを伝えるためにもバカの方がいい。若い監視員が停電の闇夜の部屋で、そのアナウンサーの口調を大真面目で真似をして、仲間たちの拍手喝采を博していた。

子供の遊びにも戦争ごっこ

広場で遊ぶ子供たちに迷彩服を着て迷彩を施した銃で撃ち合うマネをする一団が登場した。

また、テレビのアニメ漫画にも少年兵の物語が頻りに登場。戦友愛や作戦を駆使して敵を降伏させる話など、大人の軍隊物語の擬似版・ミニチュア版と言ったところ。幼い頃から戦争に馴染ませ、意識の地均しをする為政者の狙いが明確に見える。いずれも世相を反映している感じ。

頻繁な軍事パレード

軍旗を押し立て靡かせ軍人を満載した軍用トラックが 25 台もパレードの如く早朝、金日成広場方面に向かうのを監禁された平壤ホテル 3 階 32 号室の窓から何度も見た。女性兵士を乗せた一団もあった。サイレンを鳴らし凄まじい突っ走りようで、『軍が主役』の先軍思想そのものの観。

“軍民一致の美風”を鼓吹

軍人たちは、民間人と相和し、相協力し合っている という “軍民一致の美風”を鼓吹。但し、それは、『建軍記念日』のパレードの後で所属部隊に復帰するときの「沿道の民衆との交歓風景」というプロパガンダ的テレビ映像に見られるだけ。実態は、若い将校の傍若無人ぶりなど、広場での車の止め方や部下の呼び出し方 1 つ見ても目に余るほど。「軍あつての国民」という風潮に拍車。誰も文句を言わず（言えず）軍人たちの暴挙を社会的に黙認している感じ。

戦死の美化・英雄化

李寿福（リ・スボク）少年など自軍を守るために朝鮮戦争（彼らの言う「祖国解放戦争」）で鮮烈な戦死を遂げた 18 歳の若者の英雄化で“戦死”を美化・鼓吹。彼が手帳に書き遺していた愛国的詩は、広く教科書風に紹介されていた。監視員の若者たちも口を開けば「愛するのは祖国」と言い、「祖国のために死ぬ事を誇りに思う」と言っていた。抽象概念としての「祖国」を責びながら、具体的な「祖国」のはずの庭や道路に平気でペッペと、痰や反吐を吐いて汚していた。その矛盾に全く気付かない。

<金日成・金正日体制の主体（チヂ）思想で育った若者たち>

自主性のない若者たち

指揮系統（命令）に組み込まれた時だけ、しゃきっと生き生きする。自主的判断にも乏しく常に上司の判断を仰ぐ。（私に壁のカレンダーを見せて良いかどうかさえ判断できない）

計画性のない監視員たち

計画経済の国なのに、時間の組み立て、計画的行動が実に下手。主体思想は、人間のロボット化教育を全国レベルで行っている。

（昇進試験 『党の唯一思想体系における十大原則』などの丸暗記テスト）

情報が質・量ともに貧困

- 上位下達のみで馴らされ、上司に突っ込んだ質問をすると「お前は、それを知る必要がない」と厳しく却下されるので、責任の取れる範囲の言動しかしなくなる。実に言い訳と嘘をうまく使う。約束を平気で反故にし、罪悪感がない。（但し、園児や小学生レベルでは、長老の話身を身じろぎひとつしない熱心に聴き入っている。長じるにつれて権力や権威との付き合い方を覚えて狡くなり凡人化）
- 金日成一族や労働党の歴史（史実捏造も含め）には詳しいものの、花鳥風月を愛でる風情がまるでない。榆の木をアカシアや柳だと間違えるくらい名前も知らないほど。

<エピソードあれこれ>

北朝鮮から見た3悪人 ゴルバチョフ、金泳三、石原慎太郎

「悪の枢軸」と北朝鮮を名指しして非難した米国のブッシュ大統領を別格にすれば、彼らが悪人扱いして罵声を浴びせる人物 以下3人とその理由。
金成南（キム・ソンナム）調査官らの言による。

- ゴルバチョフ元ソ連大統領 西欧文化に媚びて社会主義諸国を崩壊させるきっかけを作り、共和国をピンチに追い込んだ罪。
- 金泳三（キム・ヨンサン）元 韓国大統領 金日成主席死去（1994年7月8日没）の時、「弔意を表すどころか、“南侵の脅威”と称してソウルに戒厳令を布いた。とんでもない野郎だ」と。
- 石原慎太郎・東京都知事 「『中国は近い将来、日本の脅威になるから、中国の少数民族たちの独立運動を積極支援して中国の分断化を凶って力を弱体化せよ』とドイツの新聞記者にインタビューで答えやがった」と。また、「我が国が『テポドンやノドンを日本に向けて発射する気配を見せたら、先制攻撃して基地を叩け』と言った。あんなヤツが首相になったら日本は滅ぶぞ」と怒り心頭に発して捲し立てた。

近隣外国首脳への歓迎に大格差

私の抑留中、北朝鮮の運命と深く関わる3人の首脳（他にオルブライト米上院議員）が訪朝したが、歓迎ぶりは、江沢民・中国国家主席（当時）が断トツ。次にプーチン・ロシア大統領。金大中・韓国大統領（当時）は、それなり。北朝鮮は韓国を「南朝鮮（ナム・チョソン）」と呼び、外国扱いしていないが、扱いも外交的にはどうとでもなると見縊っている感じ。反対に中国をいかに重視しているか一目瞭然だった。

ラブターを書いて炊事婦を籠絡

ハングルを勉強して数週間後、炊事婦のオバさん（52）を籠絡して味方につけるため、「これは“藤十郎の恋”である」と自認して危険を覚悟で辞書を頼りにハガキ大の紙にハングルでラブターを書いて密かに手渡した。監視員3人に見付からぬよう投げキッスもした。奏功した。以後、甘党の私に月1回、お汁粉を出してくれるようになり、友好的に。しかし、次の招待所の炊事婦（63）には失敗し、逆に調査官に密告されて灸を据えられた。彼女は、朝鮮労働党員でウルトラ金日成主義者だった。

「結婚して残れ」と言われたが断る

2001年1月中旬、平壤親善病院に連れて行ってもらう情報機関専用車の中で、トップから「好きな女性のタイプは何か」と訊かれ、「とりわけ美人ではないが、人民歌手の李京淑（リ・ギョンスク）のようなポチャポチャとした色白、丸顔で、人柄が良く、人民大衆に尊敬されるタイプがいい」と即答した。彼は「では、そういうタイプの女性を紹介するから残って結婚せよ」と迫られ「私には日本に妻子がいるから」と拒否したが、「そんなことは考えなくていい」と、更に迫ったので、「私は還暦をとっくに過ぎ、男として若い女性を満足させる能力はない」と、咄嗟に答えたら、「それでは、しょうがないな」と、矛を収めてくれた。もし平壤に残れば祖国を裏切る対

日謀略活動に加担させられるは必至なので、何としてでも帰国せねばと決意を深めていた。

「金正日総書記のカリスマ性と指導力に疑問」で激怒される

「故・金日成主席にはカリスマ性があっても息子の金正日総書記にはないのではないか。指導力も大分劣ると日本では見られている」と私が言ったところ、「我が国の主席をカリスマ性などと、ヒトラーや麻原彰晃と一緒にするな」と激怒した。「指導力にも問題ないどころか主席をも上回る」と。

サーカスの寸劇に必ず日帝攻撃ものが登場

植民地時代の日本帝国主義支配の象徴として、権力の末端にいる御巡りさんを登場させ、バカにしたり、からかったりして、最後に彼の背中に火を付けて逃げ回らせたりして観客の溜飲を下げさせる。

革命一家を称える演出

舞台の革命劇で故・金日成主席の2番目の妻・金正淑(キム・ジョンスク)女史が大きく映像として画面に映し出されると、観客の拍手が会場全体に自然に沸き起こるように演出させている。彼女を北朝鮮最高の『革命戦士』として神話化させていながら、31歳の若さで死ぬと金日成主席は金聖愛(キム・ソンエ)を後妻に迎え、愛人伝説も多い。

半端じゃない朝鮮人たちの口喧嘩

抑留中3回、朝鮮人同士の口喧嘩を目撃した。1回は、松林の中の招待所で、炊事婦のオバさんが近隣在住の主婦と門外で口論開始。異常に気付いて監視員2人が加勢に出掛け、小一時間もやり合っていた。2回目は私の目の前の広場で、50歳くらいの通行人の女性が、置き引きか万引きの嫌疑を受けて、「濡れ衣だ」「盗んだ」と大立ち回りをしていた。近所のオバさんたちがぞろぞろ集まり、恰幅の良いボスの女性が仲裁に入った。3回目は私の隣の監視員部屋で将棋を指している2人(55歳と41歳)が、突然、罵倒し合い始めた。それこそ朝から夕方まで1日中。お互いに決して妥協しない。喧嘩の理由は知らない。よくぞエネルギーが続くものだと感心した。長幼の序がないのも不思議だった。これだけ言い争えば、さぞかし気まずく口も利かぬ日々が続くだろうと思っていたら、翌日、何もなかったかのように2人でまた、将棋を指し始めた。大物なのかバカなのか民族性か。

気の小さな気分屋の調査官

尋問中、私が自白を洩ると「朝日関係が悪化している今、お前のことを『我が国の主権を侵害したスパイを捕まえた』と国内放送すれば、全国的に『杉嶋を処刑せよ!』の声が上がる。衛星放送で流せば、お前や日本は世界の恥晒しだ」と威嚇。しかし、機嫌が良い時は、「あなたを取り調べているのは、職務上、止むを得ずやっているのだから、悪く思わないで頂きたい。早く自白すればするほど早く還してあげる。その時は、自由に我が国を再び訪ねて来れば、肩を叩き抱き合って胸襟を開いて友達付き合いをしよう」と、身振り手振りまでして言った。まるで私に悪人に思われたくないための保険を掛けているつもりのようだった。更に「あなたは、日本に帰ったら、英雄だ。日本国政府が与えてくれた別荘で静かに『回想記』でも書いて余生を送るといい。私も何時かあなたを日本に訪ねて行こう。その時の名目は何がい

いかな。『スパイだった男のその後を観察するため』とでもしようか」と。ところが、私の自白調書が真っ赤な嘘だと分かって情報機関トップに「お前は杉嶋に騙されている」と叱られて震え上がって来たらしい日には、調書を床に叩き付けるなど、私に怒髪天を衝く感じで当たり散らした。結局、調査官はいつも怯えつつ、上の命令に従い、尋問が終結しても帰国させず、『回想記』の執筆を禁止したところか、彼の許可で私が抑留中書いた日記も詠んだ短歌集もすべて没収した。約束を反故したり、前言を翻えしても全く罪意識を感じない連中である。尤も彼が前言を翻えし、すべて禁止したり没収したのは、トップの命令に従ったのことであり、命令に従わないと自らの運命がどうなるかを骨の髄まで知り尽くしているからでもある。彼も亦 可哀相な人間なのだ。

金日成バッジの意図

監視員の若者が、「1972年に金日成主席がある人を表彰した時、初めて金日成バッジも同時に与えて、『胸に着けたかったら着けても良い』と言ったのが始まり」だと教えてくれた。「その後、『金正日総書記の肖像入りのものも欲しい』という声が出てきたので、作られるようになったが、正式なものではない」と。しかし、「どちらか1人だけのを着けると、もう1人に悪い」という意見もあり、主席と総書記の2人の肖像入りのものまで登場。バッジの色、形、デザイン、大きさで着ける人の身分、階級まで分かるとか。因みに私の調査官は、金正日バッジを着けて、現政権への忠誠心を表していた。「着けたかったら着けても良い」と、相手の忠誠心を“踏み絵”として試すのは、金日成の一貫した巧妙な手法である。若者に私が、「記念に出来ないか」と言ったら、「私に死ねと言うのと同じだ」と怒った。

1週間後に知らされた米9.11同時多発テロ

2001年9月18日夕刻、労働新聞掲載の米9.11同時多発テロ事件を日本語のできる若者が翻訳して教えてくれた。米国敵視の政治教育を受けた若者には、米国の悲劇は快感そのものに映っていたようだ。その夜、私は監視員部屋のテレビでCGによるツインビル激突場面を見させられた。私は、この事件のメモを基に3日間で拙歌を110首ほど詠んだ（帰国前夜没収）。

「星は太陽より小さい」と大むくれの若者

2000年5月下旬、夕暮れの西の空遠く大きく耀く星を見て「金星でもない。何の星か」と4人で議論したとき、私が、「分からないのなら“金日成星”とでもしたらどうですか」と言い放つと「我が国の首領様は太陽である。星は太陽より小さい」と大むくれ。太陽より大きい星は、この宇宙には、ごまんと在るのに、“イデオロギー”的に決め付けている。

力道山（金信楽=キム・シンラク）は最大最高の英雄

戦後の日本を古橋広之進と共に勇気付けてくれた力道山は、北朝鮮にとって最大最高の英雄である。アントニオ猪木は、彼の弟子ということで1995年の訪朝以来、英雄視されている。北朝鮮は民族の血を重視しているが、朝鮮民族ではあっても金日成の功績による英雄は、聞いたことがない。日本の政界、宗教界、芸能界、スポーツ界で活躍している朝鮮人（韓国人）には帰化している人も含め敏感で精通し、故・渥美清（俳優）の母親が車（チャ）

という姓の朝鮮人なので寅さん映画でも「車寅次郎」と言うのだ、と監視員から教えられた。

ワシントン条約より自国の都合優先

抑留中、私の食卓には、日本であまり食べない兎や犬や駝鳥や鹿や七面鳥の肉のスープが時折出された（主流はスケトウタラ）が、不勉強にも私は、「駝鳥の養殖をして食用にしているのは、ワシントン条約に反するのでは」と言った。すると若い監視員は、「ワシントン条約が何であれ、我が労働党は、人民大衆が必要または要求するものを断固として与える」と。禁じられている熊胆が北朝鮮では観光客に小さなサンプル的ではなく、丸ごと堂々と売られていることでも分かる。

「お前は共産圏では“札付き”のスパイだ」と言われる

調査官は拘束 15 年前に遡る旧ソ連・レニングラード（現サンクトペテルブルク）で私がコルホーズ（集団農場）の産品を売る市場でビデオ撮りしていて、米国のスパイと間違えられて旧ソ連警察に 1 時間ほど拘束されたことや、同じく 3 年前の 1996 年 9 月に中国・豆満江開発を調べに行き、琿春経済合作地帯で写真撮影して中国当局の事情聴取を受けたことも知っていた。「我々は共産圏で情報交換している。お前は“札付き”のスパイだ」と。

チンケなコソ泥感覚

調査官は、余程、私の持ち物が欲しかったのだろう。手持ちの日本円 12 万円を預託して洗剤やシャンプーなど私の日用品を買ったが、部下を含めて 1999 年 12 月 25 日に焼肉店で 3 人で食事をした時の支払いも部下への焼酎ミヤゲの費用も自分の喫うマールボロ 2 カートンも私の日用品の手書きの明細書にすべて巧みに上乘せした形で私に渡して、上司にバレないようにしていた。私の手持ちのネガフィルムやボールペン、バッテリーも「点検」と称して、その都度、少しずつ抜き取り、くすねて行った。いちばん笑ってしまったのは、私から取り上げたテープレコーダーやビデオカメラで尋問記録を取ったり、撮影していたことで、「（まめがら）で豆を煮られている思いだな」と。当局は没収フィルムの現像・焼き付けまで私の預託金で賄った。

また、捕まった翌年 1 月、私の預託金で調査官が差し入れしてくれたチョコレートのパックが大きいのに、なぜか 2 パックとも 3 分の 2 くらいしか入っていない。「密封してあるのに変だ」と思い、彼が帰った後、調べたら、表装印刷に「6 個入り」とあるのに、4 個ずつしか入っていなかった。2 個ずつ計 4 個抜き取って自宅に持ち帰って行ったことが分かった。また、私に出されたピーナツに手を付けないでいると、「食べずにおくと、カビが生える。捨てて来てあげる」と、勝手に持ち去った。しばらくすると、ピーナツを噛み砕く音と香ばしい匂いが風に運ばれてきた。

帰国前夜には、ビデオ撮影機、システムカメラ 2 台とレンズセット、ストロボライト、三脚、テープレコーダー 2 台や大量のフィルム、テープ、バッテリーなど一切合切没収された。「これらが欲しくて拘束したのではないか」と本気で思った。

帰国前夜に釘を刺してきたこと

このレジメの冒頭で「帰国後に共和国の内情を話せば、この世から消える」

と約束させられた旨を書いたが、その時、「あなたが日本に帰ってから我が国のスパイとして働け、とは言わないから、我々との約束を守れ」と。また、「訪日使節団の中に我々が交じっているのを見付けても決して日本国政府、外務省、情報機関に通報するな」とも釘を刺してきた。私は「もう真っ平です。日本の内閣情報調査室にも公安調査庁にも2度と接触しない。第一、あなた方は、『日本の公安調査庁は、ザルのようなもの。内閣情報調査室もややガードが固い程度で似たようなもの。日本全体、情報に関しては、丸裸同然』と言っているじゃないですか。公安庁や内調にあなた方のことをタレ込んでやっても、情報が逆流して、あなた方の所に即座に届くのであれば、『テレビであなた方を見ましたよ』と、直接、あなた方に報告してあげた方が手間が省けますよ」と、笑いながら言うと、「それもそうだな」と、納得した。それほど彼らは、「日本の情報機関は、自分たちの傘下にある」と甘く見ている。

抑留中に都内の書斎に工作員侵入

調査官は尋問中、「お前の都内の書斎の本箱の奥にロシア女と撮った写真があったな。お前が出発前に置き忘れてきたテープレコーダーは、同じSONY製でもこれとは、似ているが、一寸違うな」と言って自分のを見せた。この2点の証言だけでも実際に家宅侵入しなければ絶対に分からぬこと。「人権侵害だ」と抗議すると「我が国の主権を侵害したお前の大罪に比べれば、取るに足りない」と激怒された。また、「1巻の映画になるくらい、お前の記録がある」と言い、私が拘束されても口止めされていた家内が、平常通りの生活をしていたので、「主人が捕まったというのに、奥さんの動きがいつもと変わらない。愛されていないのではないか」と、情報機関員全員から言われた。帰国後、6ヵ月は露骨な尾行がついたが、今は影もない。時々、郵便受けの暗証番号が開けられるなど「見張っているぞ」のシグナルは、送ってきている。

< 景観（自然と街頭）破壊に見る2つのパターン >

資本主義的破壊
社会主義的破壊

商業宣伝のポスター、看板、広告塔、ネオン、チラシ
政治的スローガンやプラカードの林立。景観美を誇る金剛山の山中の大きな岩にまで「金日成主席 万歳」や労働党を称える賛歌を刻印。山にまでデカデカと『正日峰（ジョンイルボン）』などと石板が飾られている。街のメインストリートの沿道に「21世紀の太陽 金正日將軍 万歳！」のスローガンを大書。夜はデパートやビルの最上階に横に大きく「偉大な領袖 金日成同志 万歳」などのプロパガンダネオン。街は停電で漆黒の闇でもネオンだけ赤くギラギラ。

（資本主義社会では、条例などで商業宣伝に限らず、ビルの高さまで日照権などで規制できるが、北朝鮮では“国家的落書き”のような景観破壊の所行は、まして神格化された指導者絡みでは、誰も文句も言えないし、規制もできない）

< ヒトラーの独裁と金日成・金正日の独裁の質的相違 >

ヒトラーの独裁	社会的自我に目覚めた大衆 自らが選んだ独裁。第1次大戦後、ワイマール共和国という最も平和的民主的な状況を経験した大衆が選挙でヒトラー政権を樹立させた。但し、ヒトラーは、ヴェルサイユ体制下のインフレ経済の昂進と閉塞状況を打破する“希望の星”として登場。
金日成・金正日の独裁	社会的自我に目覚めぬ大衆へのお仕着せ独裁。旧ソ連の傀儡政権としての金日成と、その継承者としての金正日。大衆の自発的意思は働いていない。李王朝、日帝植民地支配の流れの中での被支配。
ヒトラーから見た大衆	すべて「他人」の集団。選挙と人気を重視。指導者像の格好良さの追求も。「結果」の善の追求が外交的成果と外的侵略へのモチベーションに。
金正日から見た大衆	すべて「身内」の集団。儒教的家父長制度を踏襲。指導者像の格好良さとは無縁。「動機」の善のプロパガンダで、失政のツケは物言えぬ国民に回す内向きの侵略。「偉大な指導者同志は国民生活の隅々まで温かい配慮を巡らしている」と「動機の善」を幼い頃からあらゆる教育機構を通じて脳に刷り込んでいる。生活に基本的に必要な「電気」「水」「食糧」などの絶対的不足にも拘らず。「動機の善」のプロパガンダが、現実の失政の本質を見誤らせている。
ヒトラーと金日成父子の共通点	思想教育、イデオロギー教育の徹底。メディア（特に映像）を駆使した政治宣伝（プロパガンダ）の重視と巨大な建造物による国民威圧の権威主義。体制の求心力としての指導者神格化・美化。
金正日政権の行方	鍵を握るのは軍の動向。指導者の失政の重みにいつまで耐えられるか。軍の暴発・クーデターの動き、特に恵まれぬ下級軍人たちの反乱の発生が注目される。宮廷革命（クーデター）の可能性は低い。外圧（米国などの経済封鎖）には、結構、持ち堪えるのではなかろうか。

おわりに

< 新しい国民的連帯感の醸成と『国の安全・平和』を守るコストへの自覚喚起を >
日本は今、民主教育と個人的人権の拡張によって戦前では考えられなかった自由を満喫した国民生活を送ることができた。しかし、同時に、ゲマインシャフ

トとしての共同体の理念は失われ、国民1人1人がバラバラになり、経済的次元でしか物事を考えられないような国家喪失国民になってしまった。

この度の北朝鮮による拉致問題に対する日本国政府・外務省の対応も亦国民不在の感がする。頼れる国家、頼り甲斐のある政府・外務省になってもらうためには、国民も亦 応分の犠牲、負担を厭わない決意と自覚と実行が必要だと確信する。そして『奉仕の精神』こそ国民的連帯感醸成の精神的土壌だというのが、私の一貫した信念である。

さらに、現在の日本に深刻な問題は、官民共に『危機管理観念』が稀薄なことだ。

我が国は、島国のため古来、外敵に襲われた経験は少なく、国防概念が国民に乏しいとさえ言える。地続きで民族間抗争を繰り返してきたヨーロッパ諸国や民族分断の悲劇を味わっている韓国民の国防意識から見ると、明らかに「平和呆けしている」。

このことは、国防の神経を司るはずの内閣情報調査室や公安調査庁に提供した私の北朝鮮情報がすっかり北朝鮮情報当局に筒抜けになっていた、という私の抑留生活での衝撃的な体験からも明らかであり、また、今回の拉致問題を見ても、日本国政府や外務省が、これほど国家主権が侵犯されている大事件にも拘らず、長い間放置し、ひたすら 北朝鮮側に宥和政策を採り、真剣に取り組んでこなかった印象を国民に与え続け、拉致被害者家族の不信を買い続けてきたことでもはっきりしている。また、中国・瀋陽で日本国総領事館に北朝鮮からの亡命者5人が駆け込んで来た時の領事館員たちの不様で国家主権侵犯を受けた怒りを忘れた態度にも象徴されている。

しかし、世界の趨勢は「日本の平和呆け」を見逃さず、あらゆる分野でぐいぐいと日本の国益を蚕食し始めている。国民精神に『国家』という背骨の無い日本は、後退に次ぐ後退である。

さらに、国際的に情報化が進み、兵器の高性能化が加速している今、我々は、これまで以上に愛する祖国、愛する郷土の平和と安全を守る自覚と支払うべきコストに目覚める必要がある。日本国が国家として官民共に有機的統一体として機能し、政府と国民との信頼関係が以心伝心で構築できる日の早からんことを切望してやまない。

以上